

## 8月5日までの広島を知っていますか

パネル共同製作代表 植松青児

uematsuseiji@gmail.com

今回掲示させていただいた約30枚のパネル「8月5日までの広島を知っていますか」は、2022年に横浜で行われた「戦争の加害・パネル展」で初めて展示したものです。第1章から4章は私が、5章は私を含め4人で共同制作しました。大きな内容構成は次のようなものです。

### 第1章●はじめに

#### 第2章 ●広島「から」の暴力（その1）…軍隊は広島から海を渡って戦場へ

「軍に乗っ取られた」街、広島／日本中の軍隊が、広島経由で戦場へ向かった／植民地支配のための「出兵」拠点になった広島／「戦争で潤う街」になった広島

#### 第3章●広島「からの」暴力（その2）…広島の軍隊は侵略戦争で何をしたか

侵略戦争に投入され、住民虐殺まで行なった広島の第5師団／侵略のお膳立てを担った、宇品の陸軍運輸部／宇品の部隊が「上陸」を手助けした「第十軍」は、南京で暴虐行為

#### 第4章●広島「で」の暴力…朝鮮人の強制動員・中国人の強制連行など

広島や長崎「で」学徒動員された女生徒の苦しみ／広島の被爆者の約1/10は朝鮮人被爆者／三菱重工広島に強制労働動員された朝鮮人労働者

#### 第5章●戦後

広島の平和公園は、「難民」を追い出して建設された／朝鮮人被爆者が問いかける日本の戦後／加害の証人としての被服支廠／沼田鈴子—戦争加害を学び、引き受けた被爆証言者

#### 第6章●おわりに

### 制作時に意識した2つの視点

展示を見てくださった方がたから、「知らなかった」「驚いた」「ショックだった」というご感想を多くいただきます。いままで共有されていなかった歴史的事実をお知らせする、という役割は果たせたと受け止めています。

ただ制作した人間としては、「驚かせた」「ショックを与えた」だけでは満足することはできません。たぶん、ゴールはそこじゃない。その意味では展示パネルはまだ十分ではない、舌足らずな点があると受け止めています。

さて、パネル制作においては2つの視点を意識していました。ともに、広島市生まれ・在住の著述家・東（ひがし）琢磨さんからいただいたものです。

1点めは、「広島に関する膨大な出来事が忘却されていて、その膨大な忘却の上に、現在の「戦後、焦土から復興した広島」や「ノーモア・ヒロシマ」の物語が立ち上がっている」という視点です。

広島近代史について「忘却されたこと」と「忘却しないこと」の振り分けがまず行われ、そして「忘却しないこと」＝「語り継いでほしいこと」となっているけど、実は「忘却されたこと」の中に、実は重要なことがたくさんある、東さんはそう指摘します。

ここには、東さんの広島戦後史に対する一つの史観、「広島戦後史は、人々の怒りが飼い慣らされていった歴史であった」という見立てが反映しています。この「飼い慣らし」の中で多くのことが「忘却」されてしまったと。

飼い慣らそうとした主体は、まずは原爆を落としたアメリカであり、そして一貫として米国追従を続ける日本政府ですが、「被爆ナショナリズム」に依拠して運動を拡大しようとした反核運動もまた、間接的に「飼い慣らし」に加担していったことも、さまざまに指摘されています。その「飼い慣らし」の戦後史のなかで何が「非記憶化」されていったのか。このことを意識しながらパネルを制作しました。

もう1点は「広島は『軍に乗っ取られた街』だった」という視点です。広島の人々がボトムアップで「この街を軍都にしよう」としたのではないということ、日清戦争を始める前に大日本帝国が「よし、出撃拠点を広島にしよう」とトップダウンで決めたこと。そして「軍に乗っ取られる」ことによって相手国の標的にされてしまった。

これは、広島だけの現象ではありません。たとえばハワイです。アメリカによって侵略され、軍事植民地にされ、そこに造られた軍事基地（パールハーバー軍事基地）が日本軍の急襲攻撃の標的になった、そういう歴史があります。つまり、ハワイの人々が強いられた苦難が、4年後に広島で「再現」されたとも言えるのです。そして同じような「軍事植民地」化は、現在は宮古島・石垣島・奄美大島などで進んでいます。そのような、広島・ハワイ・現在の琉球弧（与那国島～薩南諸島）を横断するような視点でパネルを制作しようと心がけましたが、ただ十分には表現できていないと思います。今後の課題です。

## パネル制作は、けっこう難航しました

大まかな構成はできて、資料もあらかた揃えて、あとは文章化するのみ、と当初は楽観していたのですが、とにかく筆が進まない。読み手にうまく伝えられる自信がない。

加えて、広島市民が侵略戦争の勝利に喜び、帰還した部隊を「凱旋部隊」として迎え、称賛する＝侵略戦争を下支えする歴史と向き合うのは、精神的には辛いものがありました。なんで、そんなに侵略戦争に加担しちゃうの？天皇制イデオロギーのせい？アジア人への差別感情のせい？

悶々としていたある日、「戦争で、当時の広島街が潤った」、つまり、当時の広島市民にとって、戦争＝商売が潤うものだったということに気づきました。これは、実は広島についてではなく、私自身が10代を過ごした小倉（現・北九州市）の戦後史を調べていたときに気づかされた視点です。

私は小学校6年～高校3年を小倉で過ごしたのですが、小倉は戦前の軍都であり、通った中学校の西隣はかつての兵器工場の工具住宅でした。そして戦後の小倉には米軍が駐留し、1950～53年の朝鮮戦争では兵站拠点となります。中学校から歩いて数分、旧兵器工場の跡地は米軍城野（じょうの）キャンプとなり、朝鮮戦争では米軍の出撃拠点に、さらに多くの米兵が遺体となって戻ってくる場所になりました。

その歴史を調べているうち、小倉で最大の百貨店（小倉井筒屋）が朝鮮戦争時に活況だったという記述を見かけました。井筒屋だけではなく、近隣の魚町（うおまち）商店街も潤ったと。ああそうか、軍都・兵站基地地域の住民にとっては、遠くで行われる戦争は、そこに参戦する兵士たちは、商いを潤す存在なのか。そういう出来事として、海の向こうの戦争は記憶されていくのか。

小倉の戦後史を知ることで、広島市民が戦争に好意的だった理由が少し理解できました。

当時の広島市民にとっても、海の向こうの戦争は経済活況をもたらすものであり、軍人たちは「大切なお客さん」であり、商いを潤す存在だったのでしょ。そうやって「共犯関係」を結んでしまうのか……。

同じく軍都だった千葉市にも同じような空気は漂っていたと思います。ピースフェアの会場である「キボー」は、かつては扇屋百貨店があった場所です。扇屋の開店は1933年。扇屋のライバルだった奈良屋も、百貨店の形態になったのが1930年、いっぽう広島で最大の百貨店・福屋百貨店（原爆ドームから歩いて2分ほどにあります）の開店が1929年ですから、ほぼ同時に広島と千葉で百貨店が生まれているわけですね。これは偶然の一致でしょうか。おそらく、広島も千葉も、百貨店の顧客＝中産階級がその地域で一定数に達したのが同時期であり、その背景には軍都として、一定の富の集中がなされたのではと思います。今後掘り

下げたい宿題です。

## 広島を窓口に、戦前日本の「ダメさ」と向かい合ってほしい

今回、市川さん、北川さんにお話をいただき、かつての軍都・千葉で展示させていただくことができ、ありがとうございました。準備の打ち合わせも含めて、充実した時間を共有させていただきました。また、「れきし」と「わたし」展のメンバー井上未菜さんと対談する機会をいただき、ありがとうございます。井上さんは私と同じく10代を小倉で過ごした方で、記憶化・非記憶化の問題を丁寧に考えておられて、私も多くの気づきや学びを得ました。「忘却」というのは記憶してから忘れることですが、そもそも「記憶」すらされず、あるいはうまく記憶できず、非記憶化される事象もある、重要なテーマだと思います。

パネルはまだまだ「未完成」です。

最初から最後まで広島を扱ったパネルですが、ここに描かれた事象は広島という一都市だけのことではない、「戦争ってもうかるよね」「戦争のおかげで商いが潤うよね」「やったやった、南京を占領したぞ、祝勝パレードだ」という空気は、広島だけではなく、日本全国にあまねく存在していたと思うのです。

そういった、戦前の日本社会（のダメな部分）を知らせる活動、「平和のための戦前展」みたいな活動が、これからは必要ではないかと思っています。「8月5日までの広島」パネルは、その1つのサンプルになるかもしれない……パネルが完成したあとで、そのように気づきました。あ〜あ、制作途中でもっと早く気づくべきだったよ、自分。

実は、戦争の現実、とりわけ被害の現実を共有するだけでは、これから起こるかもしれない戦争を止められないのではないかと、という問題意識が私にはあります。

戦争の現実、巨大な暴力によって人間はいとも簡単に踏みにじられてしまうことを知るのは、もちろん重要でしょう。しかし、その暴力＝軍事的暴力は竜巻のようにいきなり生まれるのではなく、台風のように半月足らずで襲ってくるものではなく、ある一定の期間をかけて、莫大な国家予算を投入し、戦略を研究し、兵器を開発し、演習を行い、世論工作を行い、反戦の声を封殺し、つまりそれなりに綿密な準備プロセスを得て生み出されるわけですね。

加えて、軍という国家機構が地域社会に侵入し、社会を変形させてしまう、しかも多くの市民がそれを拒むことなく、その侵入を喜び、誇りに思い、戦争景気で潤い、「勝利」に喝采し、「帝国」の拡大を祝う…そのような、目を背けたくなるような歴史もあったわけです。

ですから、「普通の暮らしがある平和な日常」と「悲惨な戦場」を対比させるだけでは不十分で、その両者の「あいだ」の歴史＝市民が軍隊、あるいは帝国主義と共犯関係を結んでいった、あるいは結ばされてしまった歴史、あるいは「日本軍」という巨大なモンスター集団、日中戦争以降は日本の国家予算のほとんどを使いまくり、アジアの多くの社会を破壊し、日本社会をも破滅に巻き込んでいった「ガン細胞」のような集団の歴史、そういう歴史の共有こそが、平和運動としては「キモ」だと思うのです。

そのような「共犯関係」を、これから再現させないためにも。

というわけで、広島パネルの最初と最後の1枚は書き直そうと思います。「8月5日までの広島」を入りに、戦前の日本社会をもっと知りましょうという感じに。そして「軍隊と共犯関係を結び続けた」戦前日本の市民史のパネルを、新たに制作したいな、と思っています。

今後も「ピースフェア in 千葉」とお付き合いできれば嬉しく思います。ありがとうございました。